森の名手・名人シリーズ26

名人 日下部 修（60）
岐阜県郡上市

聞き手 下田 祐也
岐阜県立飛騨高山高等学校2年
平成20年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、41名の「森の名手・名人」がいます。この「森の名手・名人」を「森の聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

伐木・集運材手
1本1本の木を子供よりかわいがらんと

1. 磨き丸太

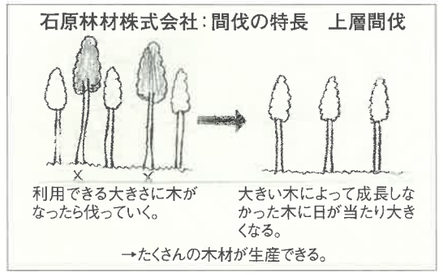
17歳で石原林材株式会社に入りました。山の木を伐り、それを架線で出しての「素材生産」で生計を立てていた会社でした。昭和46年頃からスギの「磨き丸太」という床柱の生産とか、化粧丸太の生産が始まりました。その時、日出雲（ひずも）林産株式会社というもう1つの会社ができたんです。両方の会社の親方が一緒でしたので、僕らも素材生産の仕事をしながら、磨き丸太の仕事もしていたんです。

磨き丸太っていう木は皮を剥いてその肌を見せる木ですので、肌に傷つけちゃいけません。だからかなり慎重に材を引きながら、また集材するにも丁重に扱ってきました。

磨き丸太はね、おおむね9月20日前後に伐採します。それを1ヶ月くらい「ハガラシ」といって山で水分が抜ける程度まで乾かし、それを山で造材し、集材して作業場で皮を剥ぐ。それからまた乾かし、磨いて製品にするわけです。ちゃんと乾かすには、木を造材する前に、たくさん枝が付いてる木は水引きが早いから、造材する時期を早くする。枝の少ない木は水分を吸う量が少ないから乾きにくいので、普通の1ヶ月置くものなら2ヶ月くらい置く。木の枝の数を見て造材していくと何千本と木の数があるから、葉のたくさんある木なんかは倒して置いておっても、1ヶ月経たんうちにもう縦に木が割れとることもあります。割れたら商品価値がなくなるからね。

磨く砂は「土地にある川」で集めます。流れの強いとこでは細かい砂がないからよどみのようなとこで探します。「フルイ」である程度選別して大きさをそろえた砂で磨き、上に付いてる甘皮を落とします。そしてまた砂で磨いて乾かし、最後に細かい布とかブラシ等で磨いて仕上げます。

だけど最近は若い人の考え方も違うし、家も代々受け継がれていく家じゃないからね。建築では日本間も少なくなっとるし、床柱・床の間を造る家もなくなってきとるでね。磨き丸太生産も段々少なくなってきて、ちょっと「寂しい」思いをするんですよね。



2. 木起こし

昭和56年に、僕の住む小川集落にしても3m近く雪が降ったんです。そん時に植林して5年～10年経った木はほとんど雪害で倒れてしまったと。そんで雪解けを待って、木起こし作業を前の石原林材株式会社におる時に1年がかりでずっとやったんです。ある程度小さな木は手で引っ張って起こせるんですけども、太い木は人の力で起こすに大変だったので、軽い道具で簡単に起こせるものはないやろうかと、そんな思いをしとりました。道具を作り、現場へ持っていき何度も試してみたんです。まぁ最終的に10㎝のロープと小さな滑車、「小さな自在カギ」という部品だけでできました。「小さな自在カギ」というのは、囲炉裏とかにある鯉の形をしてヒモの長さを調節できるという道具で、原理は一緒です。倒れている木は起こしてもロープを放すと元に戻ってまう。だけど「小さな自在カギ」にロープを通せば、木を起こした状態に保てる。それを山へ持って使ってみたら割合簡単にできるし、みんなに作って、こうやれと教えてやりました。

県の方から、国で林業技術コンクールというものがあるという話があって、発表したら「林野庁長官賞」というすばらしい賞を頂きました。

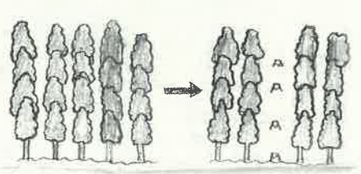
3. 木を伐る

僕が25歳のときに、先代の社長が他から家2軒分の注文を受けました。「この山で家を2軒分建てるだけの木を選んで伐って来い」と言われ、僕は何mのどれだけの太さの柱が何本いるのか、土台の木が何本いるのか、そういうのだけ頂きました。自分で山歩いて、1本1本木に登って、寸法計って、伐って、それを集材して、三重県の施主が指定する製材工場に運び、建築業者がその木を使い家を建てたんです。見して貰って「あぁ良かったなぁ」と思ったんです。その満足感が、やっぱり一番嬉しいですね。

石原林材株式会社の先代の社長とトップの人がかなり厳しい人でした。雨が降っても雪が降っても休まない感じだったのでね。だけどその厳しさがあり今の自分があると思うんです。「精神面とか体力」。木の伐り方は先輩方が教えてくれたし、習ってきて伐ったんだけど、やっぱし見よう見まねで今までやってきた。数年前から若い研修生に木の伐り方等教えておるんですけど、それを先輩方から学んでつちかってきたと思っておるんですけど。まぁそんなもんかと。

4. 省力林業を目指す

「くさかべ林業」を僕が立ちあげたのは平成4年の年だったと思うんですけども、たまたま長男が林業短期大学を、次男が高校を卒業するという時期でした。彼らの就職先も考えてやらなければいけないと思ったんです。



2残1伐の特長は林業の「省力化」。機械的に伐る列を決めるので、選木をしなくてよい。また、伐った列は搬出路として利用できるので木材を出しやすい。

間伐前

2残1伐で間伐後

僕も26年間うまいこと会社に勤めとったから、辞めて林業やってみる気があれば一緒にやるぞ、と話を持ちかけました。子供たちも引き受けてくれたので、それがきっかけで現在に至っています。

立ちあげたときは設備投資もしていかないと具合が悪いし、僕の仕事ですから自分で仕事を探してこなけりゃならん。営業面でもかなり苦労しましたけど、その仕事をやる中で、昨日より少しでも「キレイ・速い・安い」仕事をやってやれば、お客様の方から逆に今度お願いしに来るようになりますのでね。その辺を今でも大事にしてやってます。

そのために「省力林業」があるんです。省力林業とは、同じ仕事をすることに対して手間を省くということです。例えば架線に使う集材機を山でおろして、次に移動するときまた車で積んでくというのは結構面倒だったので、小さな車に集材機自体乗せてまって、車ごと移動すると楽やとかね。

5. 価値も下がり、人も減る

昔は木材の価格が今より4倍5倍高かったからね。今は本当に木材の価格が安い。だから生産性をあげるには、ある程度機械を入れていかないと具合が悪いし、簡単にできる集材方法にしなきゃならない。けどもそれらに変えるには銭がかかるのでね。今の国と県の補助金制度に対しても、ひとつの民営団体とか森林組合とかは助成金が多く受けやすい。だけど個人でやっとるとこはなかなか厳しいから、その辺もある程度平等にしてほしいと思います。

昔は林業をやっておられる方も多かったんですけども、今は段々少のおなりつつある。今Uターンされる方でも、過去から見りゃかなり減少しています。けども県とか国の事業の中で研修を受けられ、帰ってくる方が段々増えてきとる感じがします。Uターンした方が、林業をやっておられる姿を見ると嬉しい思いをしています。

僕もここ数年若い人たちに林業講習をやらせて頂いております。特にチェーンソーや、集材機といった研修の指導をしに行きます。やはり若い人たちの「やる気」というものが目に見えてくると本当に僕らも嬉しいし、楽しいですね。

もう少し木材の価格が上がってくれればお互いに良いなと思うんですけども。機械に投資しやすくなるし、若い人達も機械を使って山に馴染んでくると思うんです。

1本千円もしない丸太

高性能林業機械

6. 林業で持つべき気持ち

どっちかといえば素材生産の方が得意な分野なんで、林業のやりがいと言えば、いろんな山で伐採して何日で木をどれだけ出せるとか、間伐で残した木にキズつけずに出してこれたかとか。そういった自分に対する満足感が一番の楽しみというか誇りやと思います。

人の山で手入れして木を伐らしてもらい、その手間賃と木を売ったりして生活をしとるわけです。やはり今の僕自身の経営内容から見てみますと、人の山でやらしてもらっとるんだから、「キレイ」で「丁寧」な仕事をしなければダメ。「ありがたかったね、良かったな」って満足して頂けるように心がけています。また次に「お願いします」と言っていただけるような仕事をしないと経営は成り立っていかないね。

また、山に飯を食わせてもらっとんだから、山に対しても「恩返し」をしていかないと、と思っております。木1本1本を自分の子供以上にかわいがって大事にしてかないと、山作りはできてこないね。

名人 日下部（くさかべ） 修（おさむ）さんのプロフィール

- 生年月日：昭和23年8月17日生まれ
- 出身地：岐阜県郡上市
- 職業：林業サービス業（伐採・集材・運材・地拵え）

明宝小川地区で生まれ育ち、石原林材株式会社に昭和40年から勤務した。昭和56年、豪雪の被害木対策で考案した「木起こし」は林野庁長官賞を受賞している。平成4年から伐採・集材を専門とした「くさかべ林業」を立ち上げた。機械集材における丁寧な仕事ぶりは評判が良く、不況な中でも仕事の依頼が絶えない。林業の後継者育成についても講師として力を入れている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】